

〔大阪城南女子短期大学研究紀要 第58巻 77 ～ 92頁 令和6年3月〕

外国人から見た日本人の子育て

— 戦国時代から明治時代初期に来日した外国人の手記を元に —

芝田 圭一郎

〔論文〕

外国人から見た日本人の子育て —戦国時代から明治時代初期に来日した外国人の手記を元に—

芝田 圭一郎

【概要】

現在の日本の子育て観には海外からもたらされた教育観の影響を受けている点がある。しかし、明治時代以前であれば日本独特の子育てがされており、そして日本独特の子育て観があったはずである。来日した外国人によって日本の子育てに関する手記が残っており、外国人たちは戦国時代から江戸時代までの日本人の子育てを賞賛していた。子ども達を愛し、いたわる様子をそれぞれの手記に記録している。ここから日本独自の子育て観を考察すると、日本の子育てが当時の西洋の子育てと違っており、日本人の親達は子どもを大人とは分けた全くの別の存在として受け止めていた。それは近代西洋の子ども観とも違う、独自のものであっただろう。日本人の子どもは親の一部であり、共感できる存在であり、親達は子どもを一人の人間としてもみなしていたのであろう。日本人のこの子ども観の背景にあるのは農耕民族としての調和性であったが、現代に時が流れていく中でこれまでとは違う思想が海外からもたらされた。過去の日本人の子育ては見習うべき点があるものの現代の子育てに関する諸問題の要因の一つになっていると考察される。

はじめに

現在の日本の子育て、子ども観は明治時代（1867 年）からの家族制度や戦後の新しい教育制度の影響を大きく受けている。（北田,1999）これらの子育てに影響を与えたものは海外、特に西洋からもたらされたものであった。つまり、明治時代以前はこれらの影響を受けていない、日本独自の子育てが展開されていたと思われる。しかし、明治以前にも西洋との交流は存在しており、日本に初めてキリスト教をもたらしたフランシスコ・ザビエル（Francisco Javier）を始めとした、宣教師や商人など多数の外国人が来日していた。江戸時代に入っても徳川幕府により、来日する外国人は制限されていたが、中国、朝鮮、オランダとは国交や商業通商関係があり、オランダ商館に勤める外国人などがいた。黒船来航以降、日本は開国し、幕末から明治時代へと時が移るにつれ、来日する外国人は増えていった。

中でも宣教師や長く滞在した外国人によって日本の子育てに関する手記が残っている。彼らは日本人の子育てを見て、驚きを隠せないほどであったようで、それぞれの手記に日本人の子育て

に対して、驚嘆や賞賛の声を記している。その驚きの根底には彼ら自身が受けた西洋の子育て、教育観、子ども観の違いがあると思われる。そこで戦国時代から明治時代までに来日した外国人が育った当時の西洋の子育てや子ども観といった歴史的背景を踏まえながら、日本人ではない外国人の目に映った日本人の子育てについてそれぞれの手記を取り上げていく。そして日本独自の育て観を外国人の観察録から考察し、また近代以前にも海外との交流もあったので日本の育てにどういった影響を受けたのか、考察していく。

I 中世及び近代（1500～1800年代）の西洋における子育てと子ども観

① 中世西洋の子育てと子ども観

日本に初めて訪れた西洋人は 1543 年（1541 年や 42 年という説もある）に鹿児島県種子島に火縄銃を伝来したポルトガル人であるとされている。その後 1549 年に鹿児島にフランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝える。このザビエルの手記にて初めて日本人の子育てに関する記述が登場する。この 1500 年代のヨーロッパではどのような子育てをしており、どのような子ども観を持っていたのだろうか。この年代は中世に当たり、ローマ教皇や十字軍、王族の歴史の文献はあるが、個人の伝記を除き、過去の年代の家族や児童全般について最近まで文献は殆どなかった。中世の西洋における児童期に関して、日本にはアリエス（Philippe Ariès）、ショーター（Edward Shorter）、ドゥーモス（Lloyd deMause）といった代表的な著作の翻訳書が存在する。1960 年にアリエスが「私たちが出発点として取りあげている中世の社会では、子供期という観念は存在していなかった」（P・アリエス,1980）と発表している。この発表以降、多くの歴史学者が中世の児童期に関する論文を発表している。学説としては大きく分けて二つの流れがあり、アリエスの説を肯定する学派と否定する学派に分けられる。アリエスは「このことは、子供たちが無視され、見捨てられ、もしくは軽蔑されていたことを意味するのではない。子供期という観念は、子供に対する愛情と混同されてはならない。それは子供に固有な性格、すなわち本質的に子供を大人ばかりか少年からも区別するあの特殊性が意識されたことと符合するのである。中世の社会ではこの意識が存在していなかった。」（同）と続けている。アリエスが児童期はなかったとする根拠を岩崎・兎沢は以下の 6 点を挙げている。（岩崎・兎沢,2002）

- ① 16 または 17 世紀まで幼児以上の子どものための特別な服はなかったこと
- ② 恐らく 17 世紀まで子どもは幼児以降大人と同じゲームで遊んだこと
- ③ 16 世紀まで子どもは日常的に好色性にさらされたこと
- ④ 17 あるいは 18 世紀までは学校教育を受けていた子どもの年齢に関して明らかではなかったこと
- ⑤ 中世の人々は家族に対して十分な価値を認識していなかったこと
- ⑥ 15 世紀になっても子どもは 7 歳または 9 歳には家庭を追い出されていたこと

アリエスのこれらの主張には賛否両論あり、その多くは「子どもは小さな大人である」という子ども観が多数で、これが中世西洋の子ども観であった可能性が高い。

同様にショーターは中世西洋の子どもに対する親の態度に注目した。「母親が幼児の教育に心を砕くようになったのは、近代になってからのことである。伝統社会では、母親は、二歳以下の幼児の成長と幸福には無関心であった。」(E・ショーター,1987)としており、「母親は、幼児といえども自分と同じように喜びや痛みを感じることでできる人間だとはほとんど(「まったく」という人もいる)思っていなかった」(同)と続け、中世西洋では、現在のような子どもを一人の人間として尊重するような子ども観ではなかったと主張する。そして母親は「幼児の身になって、幼児のこの世界がどう映っているかを想像し、できるだけ幼児にとって居心地のいい、楽しい世界を作ってやろう—われわれが『共感』という言葉で言いあらわしていることである—とは思わなかったのである。これら何百万の伝統社会の母親は、べつに残虐非道の人間であったわけではない。彼女たちは、ただ『犠牲』テストに失敗しただけであった。彼女たちが、本来の母性愛をもっていなかったとすれば、それは、生活条件や共同体への気くばりから、やむをえず、子どもの幸せよりも他の事柄、たとえば野良仕事や夫を手伝って機織りをするを優先しなければならなかったからである。」(同)とショーターは述べ、中世西洋の母親は子どもを愛さず、無関心であり、そして子どもが自分同様に喜怒哀楽や痛みを感じるとはみなしていなかった。中世西洋の母親は子どもよりも、自分が生きることを優先していたのである。

ドゥーモスも子ども観に対して「体罰を受ける子どもに共感反応をするという単純なことさえ、昔の大人にとってはむずかしかった。子どもを打つべきではない、と忠告した教育者は近代以前にきわめてまれであったが、そういう人たちでさえ、子どもに痛い思いをさせる、ということよりも、悪い結果をまねく、ということを根拠に批判的だったのである。しかし、共感という要素が当時は欠けていたために、その忠告は少しも効を奏さず、子どもはあいかわらず打たれつづけていた。」(L・ドゥーモス,1990)とショーター同様に親が子どもに対して共感を持つことができなかったとしており、体罰も平然と行われていた。

このように中世西洋の子ども観や子育てが軽くみられていたとしているが、それぞれの主張の根拠となる資料が、少数の知識人の日記、宗教的文献や絵画、建造物の彫刻などであるため、不明確である。そのため中世西洋では反対に、子どもを大事にする子ども観や子育てが存在したのではないかと主張する研究者もいる。よって岩崎・兎沢は「中世は1000年以上にわたる期間があり、科学的統計手法により年代ごとに調査統計をしたものはないので、論者によって、その扱っている期間が異なり、調査の出典もきわめて少数の者にしか適用できないものであったりするため、中世全般を一般化した児童観を論じるのは困難である。」(岩崎・兎沢,2002)としている。しかし、現代のそれと同様に、多くの親は彼らの子どもを大切に思い、愛情をもって接する親もいれば、残酷または無関心に子どもに対して振る舞った親もいたということは確かであろう。

② 近代西洋の子育てと子ども観

中世の子育てや子ども観は近代に移り、コメニウス（Johannes Amos Comenius）に始まり、ルソー（Jean-Jacques Rousseau）やペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）、フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel）といった教育学の祖が登場し、一変する。中世との大きな違いは子どもに対する見方である。中世の子ども観を一言で表すのなら「子どもは小さな大人である」であった。だが近代になると子どもは大人と別れ、コメニウスの「子どもは大人の雛形ではない」、ルソーの「子どもの発見」というような言葉が表すように、「子ども」という大人とは違う枠組みが出来上がる。では子どもをどのように見ていたのかというと、大人とは違う未熟で、未完成な存在であるとみなしていた。フレーベルは性善説の立場をとっており、その子ども観を荘司は「生まれたばかりの子共は、あたかも親木から落ちてきた熟した実のようなものであり、生命を自己のうちにもっている成熟した種子のような発展的なものである」（荘司,1985）と述べている。子どもは親といった大人ではなく、これから成長し、一人の人間となっていくことを説いた。この子ども観の背景にはキリスト教が大いに関係しているのではないだろうか。子ども達をよきキリスト教徒に育て上げるべきだと親たちは考えていた。そしてその理由として、子どもというのは理性的でないから、理性を持った人間に育て上げることが必要だと考えたからだ。だから子どもは大人とは違うという子ども観に繋がったのであろう。

この子ども観は徐々に人々に浸透していくが、浸透していった背景に学校の存在があるとアリエスは指摘している。（P・アリエス,1980）中世では例外であったはずの学校に通う子どもの数が増加していくことになる。当然学校が普及するのは経済的に余裕のある上流階級からになり、そして中流階級から徐々に学校へ行く子どもの範囲は拡大されていき、教育の担い手は学校へと移り、教育は次第に学校でなされていくことになる。近代的な学校では、生徒と教師という構図が生まれる。これは言い換えると、大人と子どもの分離がなされたと言える。そして学校では、大人である教師が子どもである生徒に対して知識・教養はもちろん、社会的道徳なども教えていく。学校に通うようになると、かつて分離されていた子ども達は成長し、大人へと変貌しながら大人というものを学んでいく。こうして親子間の感情的な交流が深まることになり、親は子どもにまなざしを向け、集めるようになる。

近代西洋では、子どもは以前に比べてはるかに重要な登場人物となり、親の関心が子どもへと向かうようになる。しかし、中世の子ども観が近代へと変化していくといっても、それは長い間、貴族や上流階級に限られていたのである。それ以外の階層では、まだ中世のそれが根強く残っており、実用的な教養を教えない学校は嫌われる存在であったことが理由の一つである。19世紀においてもなお、人口の大部分を占めていた最も貧しい人々は、中世の子育て、子ども観を保持していたのであり、子ども達は不遇の時代を過ごしていた。しかし時が経つに連れ、近代の子育て、子ども観は近代家族の形成、成立と共に、社会のほぼ全体に拡大していったのである。

II 戦国・安土桃山時代（1500年代）に來日した外国人の手記から

戦国・安土桃山時代（1467 年 -1603 年）は、室町時代の終わりと江戸時代の始まりまでの時期で、豊臣秀吉が天下統一を果たし、豊臣政権が成立した。この時代の日本の子育てについては、一般的な特徴がいくつかあると中江ら、多くの研究者が考察している。（柴崎・安齋,2005）（太田・湯川,2021）（中江,1976・2002）

まずは「家族制度と役割分担」である。安土桃山時代の家族制度は、戦国時代の混乱からくる不安定な要因も影響していた。一般的には、男女の役割分担が厳格であり、男性が仕事や戦に従事する一方で、女性は家庭において家事や子育てに従事することが期待されていた。次に「身分制度と教育」である。安土桃山時代は身分制度が根強く残っており、身分によっても子育て環境が異なっていた。武家や商人の家庭では、子ども達は家業や家族の期待に応じた教育を受けており、寺子屋や私塾での教育も存在したが、一般庶民の子ども達がこれに通う機会は限られていた。そして「親子の絆と伝統的な価値観」である。安土桃山時代の日本では、親子の絆が重要視され、親が子ども達に対して家族の伝統や価値観を教え込むことが期待されていた。家族は安定した社会的な支えであり、親が子ども達に対して深い愛情を示すことが一般的であった。しかしこの深い愛情は現在の愛情の形とは異なっていたことは確かである。また「社会的不安定さと子ども達の働き」も関係しており、戦国時代からの混乱が安土桃山時代初期に影響を及ぼし、社会的な不安定さが残っていた。この時期には、特に農村部や一般庶民の家庭では、子ども達が早い段階から労働に従事することが一般的であった。そのため、18歳や20歳で大人や成人とする現代とは違ってもっと早くに元服を迎え、大人や成人となっていたため、“大人びた”子ども達が多くいたのである。これらは一般的な傾向であり、個々の地域や家庭によって異なる要因が影響していた。当時の日本の社会が軍事的な変動や政治の不安定さに影響されていたことから、子育てにおいてもその時代背景が色濃く反映されていたと言える。（同）

戦国時代および安土桃山時代には、日本への外国人の訪問や文書の交流は限定的であり、江戸時代に比べてその数は少なかった。当時の外国人の多くは貿易や宗教的な使節として日本を訪れていたが、子育てに関する具体的な記録は少ない。戦国時代と安土桃山時代は、戦乱や政治の不安定さが特徴であり、外国人との交流は制限されることが多かった。また、当時の外国人は日本の文化や習慣に十分に理解が及んでいないことが多く、そのため子育てに関する観察や記録が残されている文献が限定的になってしまっている。江戸時代になると、日本が比較的安定し、外国人との交流が活発になる。この時代には、イエズス会宣教師やオランダ商館のメンバーなどが日本に滞在し、その中には日本の日常生活や文化に関する観察を記録した者がいたが、戦国時代や安土桃山時代にはそのような外国人の訪問や記録は限られている。（山本,2016）

そういった中、日本に初めてキリスト教を伝えたスペイン人の、イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル（Francisco Javier）は、スペイン・ナバラ生まれのカトリック教会の司祭、宣教

師であり、イエズス会の創設メンバーの1人であった。ザビエルはイエズス会の目的である世界宣教のため、南アフリカ、インド、マラッカ、明（中国）と渡り、1549年に鹿児島に到着する。同年、カトリックの拠点であったインド西海岸のゴアに宛てた書簡に「第一我等が今日まで交際したる人は新発見地中の最良なる者にして、異教徒中には日本人に優れたる者を見ること能はざるべし。この国の人は礼節を重んじ、一般に善良にして悪心を懷かず、何よりも名誉を大切とするは驚くべきことなり。（中略）この国の人は善良なる意思を有し、よく人と交はり、大に知識を求め、デウスのことを聴き、これを解する時は甚だ喜べり。」（村上,1968）と日本人を高く評価している。特に日本人は名誉を重要視し、優れたキリスト教徒になりうる資質が十分にあるとみていた。

またザビエルに同伴した修道士のゴンサロ・フェルナンデス（Gonzalo Fernández）も書簡を宛てている。彼に関しては不明な点が多いが、ザビエルが離日後も日本で布教を続けている。1560年に、ポルトガルのコインブラに宛てた書簡の中で「その子（日本人の子どもを指す）を育つるに当り大にこれを愛し、これを懲すことなし。」（同）と、日本人は虐待をせず、子どもを愛し、大切に育てていることを報告している。

またポルトガル人のイエズス会宣教師ルイス・フロイス（Luís Fróis）は1563年に念願だった、日本の長崎に上陸する。そして「日本覚書（にほんおぼえがき）」という記録書を、1585年に島原半島の加津佐（現長崎県南島原市）において記している。この記録書は日本人と西洋人との比較を中心に展開されている。その中で、子どもに対して体罰・虐待を行わないこと、子ども達は寺で学習すること、日本の教育はまず書くことから学んで読みを学ぶこと、日本の子どもは10歳でも50歳と同じくらいの判断力と賢明さ、さらには思慮分別を備えていることを賞賛している。（E・ヨリッセン,1968）同様に、日本人女性がいとも簡単に、そして何度も墮胎すること、嬰兒を育てることができないと判断すれば殺すこと、すなわち間引きに対して驚愕している。（同）この間引きに関しては後述する。なぜこのような子ども観や子育ての方針に違いが生じたのか、フロイスは日本と西洋の違いの列举にとどめ、その原因を明らかにしていない。当時の西洋では鞭などによって子どもに体罰を与えることを是とし、言葉による温和な方法だけでは子育ては不可能とみなしていたので、この方法に関心をもったのである。

さらに1579～82年、1590～92年、1597～1603年の3度にわたって来日し、天正遣欧少年使節を企画し、インドのゴアまで同行した、イタリア人のイエズス会宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano）は著書「日本巡察記（にほんじゅんさつき）」において、第1次訪日の記録を次のように報告している。「国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きすることを覚える。また下層の人々の間にも、我等ヨーロッパ人の間に見受けられる粗暴や無能力ということがなく、一般にみな優れた理解力を有し、上品に育てられ、仕事に熟達している。」（A・ヴァリニャーノ,1973）

当時の外国人宣教師たちがどのような地域で活動し、どのような社会階層の人々に触れていた

のかという点においては不明だが、彼らには日本人、特に子ども達が優秀であることを報告している。また、ヨーロッパに比べて、日本の青年や女性もしっかり教養を身につけている点を賞賛している。しかも、日本人の知識や教養、作法などの同一性、均質性にも注目している。彼らが来日していた時代は戦国時代と呼ばれている時代であり、我々現代人がもつイメージとは違った生活や教育を、当時の日本人が行っていたことがわかる。

Ⅲ 江戸時代から明治時代に（1603～1800年代後半）来日した外国人の手記から

江戸時代の日本は、外国人によって異なる視点で見られていた。江戸時代の日本は長らく外部との交流を制限していたが、一方で貿易の拠点である長崎や、一部の異国船の来航などもあり、外国人との接触も一部で行われていた。そこから江戸時代の外国人が日本をどのように見ていたかについて河合や山本は以下のように指摘している。外国人は当時の日本を異国情緒あふれる場と見なし、独自の文化や風習に興味津々であった。特に、独自の衣装、建築様式、庭園、そして風俗習慣に驚きを覚えることが多かったようで、その異国情緒と奇異さに驚愕している。次に日本は当時、厳格な社会的階層や秩序が維持されていたため、外国人はこの階層社会に驚き、武士や農民、町人などの社会的な区分やそれに基づく生活様式に注目し、階層社会と厳格な秩序に着目していた。また日本の美意識や芸術に外国人は感嘆の念を抱いていた。特に、茶道や歌舞伎、浮世絵などが外国人にとって新奇で魅力的な要素であったようだ。そして当時の政策の影響で、外国人との交流は制限されていたが、一部の異国船や貿易拠点では外国人との接触があった。この時期の外国人は、日本の政治体制の影響を感じるが多々あったようだ。（河合,2015）（山本,2016）最後に武士道精神である。武士の精神や武道に対する姿勢は、外国人にとって独特で興味深いものだった。戦後にルース・ベネディクトが「菊と刀」を著するように近年になっても外国人にとっては驚嘆する日本人の精神である。この武士の忠誠心や芸術への姿勢は、外国人の感心を大いに集めていた。このように当時の日本は外国人にとって奇異で興味深い土地と見られ、これが19世紀半ばの開国に繋がる一因ともなっていく。（ルース・ベネディクト,2005）

日本に来日する外国人は制限されることとなるが、江戸幕府は中国、朝鮮、オランダとは国交や商業通商関係を結んでいたため、オランダ人のフランソワ・カロン（François Caron）が長崎のオランダ商館に勤めており、その手記が残っている。カロンは1619年にオランダ東インド会社船の料理人として来日し、平戸にあったオランダ商館に勤める。その後、1638年に第8代オランダ商館長になり、約22年間滞在する。その間に日本女性と結婚し、6子もうけている。1645年に刊行した「日本大王国誌（にほんだいおうこくし）」の中で、当時の日本人の子育てについて次のように記している。

第十九問 子供の教育

彼らは子供を注意深くまた柔和に養育する。たとえば終夜宜しく泣いたり叫んだりして

も、打擲することはほとんど、あるいは決して無い。辛抱と柔和とを以って宥め、打擲したり、悪口したりする気を起こさない。子供の理解力はまだ発達していない。理解力は習慣と年齢とによって生ずるものなるを以って、柔和と良教育とを以って誘導せねばならぬというのが彼らの解釈である。七・八・九・十・十一及び十二歳の子供が賢くかつ温和であるのは驚くべき程で、彼らの知識・言語・応対は（老人の如く）、和蘭では殆ど見られない。（※）（中略）常に名誉欲をうえ付け、名誉に関して他に勝るべしと激励し、短時間に多くを学び、これによって本人及び一族の名誉を高めた子供の実例を挙げる。この方法により彼らは鞭撻の苦痛が齎らすよりも、更に多くを学ぶのである。

（※）日本は小児の天国であることは、蘭人のみならず、欧人の一致として言う所である

（F・カロン,1973）

先述したように著者の置かれていた立場や観察した地域や対象に注意が必要であるが、当時の日本の子育てと教育が強制や威嚇、折檻ではなく、辛抱と優しさをもって行われていることを示している。また名誉を重視し、もたせることで、大きな効果をあげているという点もカロンの目にも映っていたのである。

時代は流れ、幕末の到来となる事件が黒船来航である。アメリカ合衆国からの軍艦に乗って来日したのが、アメリカ海軍の提督マシュー・ペリー（Matthew Calbraith Perry）である。ペリーは1853年と1854年に、日本への開国を促すために黒船と称されるアメリカ海軍の艦隊を率いて浦賀湾に入港し、後に著作を通して日本人論を展開している。（M・C・ペリー,2014）その「ペリー遠征記」では日本人の素養を高く評価しており、日本が開国に向けて大きな変革を遂げる一助となる。そして、外国人の来日が増加することとなり、幕末の日本の様子が世界に知られていくこと、そして今日に伝える重要な一因となっていく。

先述したカロンと同じように1820年～29年の間、オランダ商館に勤めていたフィッセル（Fisscher, Johan Frederik van Overmeer）も「私は子供と親の愛こそは、日本人の特質の中に輝く二つの基本的な徳目であるといつも考えている。このことは、日本人が、生まれてからずっと、両親がすべてを子供たちに任せてしまう年齢にいたるまで、子供のために捧げ思いやりの程を見るところははっきりとわかるのである。そのような場合、すべてがちょうど返礼であるかのように、子供たちは報いるのである。（中略）日本人の性格として、子供たちの無邪気な行為に対しては寛大すぎるほど寛大であり、手で打つことなどとてもできることではないくらいである。」（フィッセル,1978）と親の子どもに対する心情に関して、感銘を受けている。しかし、間引きに関して「ある著者は述べているが、どうしてこのようなことが述べることができたのか、私には理解しがたい」（フィッセル,1978）と、日本人の親子の姿からは理解できないとしている。

幕末の1859年に来日したイギリスの初代駐日総領事ラザフォード・オールコック（Sir Rutherford Alcock）は日本に3年間、滞在し詳細な記録を残した。オールコックは江戸の実態として「子供は歩けるようになるまでは、母親の背中に結びつけられているのがつねである。（中

略)だが、幼い子供の守り役は、母親だけとはかぎらない。江戸の街頭や店内で、はだかのキューピッドが、これまたはだかに近い頑丈そうな父親の腕にだかれているのを見かけるが、これはごくありふれた光景である。父親はこの小さな荷物をだいて見るからになれた手つきでやさしく器用にあやしながら、あちこち歩きまわる。ここには捨て子の養育院は必要でないように思われるし、嬰兒殺しもなさそうだ。」(オールコック,1962)と記録し、父親が子どもを抱く様子を写生している。幕末とはいえ、まだ鬻を結っている時代であるが、そうした時代でも父親が育児に参加していることが当然であったのである。

この嬰兒殺し、つまり子殺しであるが、オールコックのように事実としてないと記している者もあれば、フロイスのように意図も簡単に女性が実行していたという記述もあり、相反している。結論から言えば、子殺しは実行されており、古くは中世から行われていた。1690年に江戸幕府が初めて子殺しや捨て子に関する禁止令が発令し、幾度となく御触書として出され、明治時代になっても政府が発令していた。(柴崎・安齋,2002)日本人が子殺しを行っていた背景に日本は祖霊信仰社会であったことが挙げられる。死んだ子どもは生まれ変わるとされていた。その証拠に子殺しされた胎児は墓を作らずに、家の床下に埋めるという慣習があった。そうしておけばその胎児はまた生まれ変わって、次の子どもとして出産されるという信仰があったのである。この子殺しの親の心情を「子どもを殺すのではない、育てないのだ、子どもにしないのだという意識、意味合いで床下に埋めるのです。いつかまた時期がくれば、産まれてくるという、そういう感じ方は、現代の人間の感覚とは違うでしょう。」と北田は推察する。(北田,1999)この子殺しは農民や庶民、侍(武士)までの全階級で、日本全国どこでも広範囲の地域で明治時代まで行われていた。(太田,2007)

一方で西洋ではこの子殺しはあったのだろうか。ドゥーモスは「親たちが慣例的に行っていた子捨ての実態はこれまでめったにとりあげられたことはない。」(L・ドゥーモス,1990)と述べており、子殺しは少なからずあっても、子どもを捨てる方が多かったようだ。西洋の親は様々な理由で子どもを捨てたが、それでも子どもが誰かに拾われることを期待していたようだ。つまり、捨てられた子どもを救済する人がいたことを表している。(岩崎・兎沢,2002)このことから日本と違い、子どもを殺さず、他の大人に子どもを委ねていたということが分かる。日本は祖霊信仰から子どもの生まれ変わりを期待したが、西洋ではそのような信仰はなく、その子の将来に期待するも育児を放棄した形であった。

他にも江戸時代末期から明治時代初頭にかけて来日した外国人の手記には、子育てに関する記述も見られる。アレクサンダー・フォン・シーボルト(Alexander von Siebold)は江戸時代後期に発生するシーボルト事件のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの息子である。ドイツの博物学者で、1859年に来日した。彼の手記には、日本の子ども達の遊びや教育に関する観察があり、日本の子ども達が親や兄弟姉妹との結びつきが強く、親しみやすい性格を持っていることに注目している。(A・ジーボルト,1981)シーボルトは日本の家族構造に注目し、親と子ど

も達の絆が強く、愛情深い雰囲気があることを指摘しており、子ども達が親に対して尊重と感謝の念を持ち、親も子ども達に対して深い愛情を示していると感じている。また日本の親が子ども達に対して指導的であり、教育に真剣に取り組んでいる様子を観察している。親が子ども達に様々なことを教え、生活の中で実践を通じて学ばせる姿勢に感心している。さらに日本の子ども達が遊びを通じて自然と調和し、同時に学びの要素を取り入れていると記述している。子ども達が自然との触れ合いや探究心を大切にし、親からの教えを受けつつも自主的に学ぶ姿勢が見受けられると指摘している。これらの記述から分かるように、シーボルトは日本の子育て環境に対して好意的で、親子の絆や教育への姿勢に感心していた。(同)

これら以外の手記にも外国人が当時の日本の子育てに対して興味深く観察し、記述している。その多くは日本への旅行者や外交官である。それらは日本の子育ての様子の一部の観察や感想であり、個々の外国人の視点や経験に基づいている。

アメリカの美術評論家、アーネスト・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa) は、1878 年に来日し、彼の手記には日本の子ども達の教育制度や家族構造に関する書き込みが一部であるが見られる。特に学校教育や親の役割についての記述が多く含まれている。(A・フェノロサ, 2008) 彼は日本の親が子ども達に厳格な規律を課す一方で、親子の絆が強く、家族全体が協力して生活する様子を記録している。これ以外にもロシアやイギリス等、諸外国の外交官の手記の多くには、日本の親の指導や尊敬、教育の手法、そして子ども達が礼儀正しく、親の教育によって従順であるといった点を記録している。(山本, 2015)

江戸幕府が倒れ、新時代「明治」となると急速に西洋化が進むと同時に来日する外国人も急激に増えていく。1878 年に来日し、東京から北海道まで旅行し、旅行記を記したイザベラ・バード (Isabella L. Bird) は日光に滞在しているくだりで、「私はこれほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。(中略) 子どもがいなくてつまらなそうである。他人の子どもに対しても、適度に愛情をもって世話をしてやる。(中略) いくつかの理由から、彼らは男の子の方を好むが、それと同じほど女の子もかわいがり愛していることはたしかである。」(イザベラ・L・バード, 2000) と日本人の子どもに対する愛情に大変、驚いている。そして「子どもたちは、私たち(欧人)の考えからすればあまりにもおとなしく、儀礼的にすぎるが、その顔つきや振る舞いは、人に大きな好感をいだかせる。彼らはとてもおとなしくて従順であり、喜んで親の手助けをやり、幼い子どもに親切である。(中略) 彼らが怒った言葉を吐いたり、いやな眼つきをしたり、意地悪いことをしたりするのを見たことがない。」(同) と子どもの様子を記している。このバードが記した「日本奥地紀行」は実際に見たものをそのまま記しているので信憑性は高い。子どもに関する描写はこれだけではなく、秋田県白沢、青森県碓ヶ関での滞在でも同様に子どもが生き生きと遊ぶ様子、そしてそれを喜んで眺める親の様子を記している。子どもを愛し、子どもの遊ぶ姿を見ることに喜びを感じる親が、明治時代初期の日本に存在していたことになる。バードは、日本の母親が子ども達に対して非常に愛情深く、家族全体が協力して生活する姿勢に感銘を受けており、

日本の家族構造に関心を寄せ、特に親子や兄弟姉妹の絆が強いことに注目し、日本の家庭が温かく、家族が互いに支え合い、愛情をもって接している様子を描写している。他にも日本の母親が子ども達に対して非常に愛情深く、子ども達が礼儀正しく、親に尊敬の念をもって接することに感心している。また親が子ども達に道徳や社会規範を教え込む様子も触れている。そして当時の日本において女性の役割や家庭内での重要な位置にも着目し、女性たちが家庭を管理し、子ども達に教育を施す一方で、農業や手工業にも従事している様子を記録している。さらに子ども達の遊びにも言及があり、彼女は日本の子ども達が祭りや伝統的な行事に参加し、自然と調和した遊びを楽しんでいる様子も驚きとともに記録している。これらの記述からは、バードが当時の日本の子育て環境に対して好意的で、親子の絆や教育への姿勢に感心していたと考察する。(同)

同じ頃、1877 年に来日している、大森貝塚を発掘したことで有名なアメリカの博物学者、エドワード・モース (Edward Sylvester Morse) は著書の中で子ども達の生活に触れ、「人々が手をつなぎながら、一緒に歩いているのは見て気持ちがよい。大きくなった娘と、彼女のお母さんなりお祖母さんなりは、十中九まで手をつないで行く。お父さんは必ず子供と手をつなぎ、何か面白いことがあると、それが見えるように、肩の上に高くさし上げる。」(E・S・モース, 1970) と親子の様子に感銘を受けている。そして、祭礼に参加している親子の様子を見て「日本はたしかに子供の天国である。そして、うれしいことには、この種の集まりのどれでも、また如何なる時にでも、大人と一緒に遊ぶ。」(同) と日本の親子の姿に対する感想を綴っている。モースは、日本の子ども達が自然と親しんでおり、親の指導によって自主的に学ぶ姿勢が見られると述べている。この手記には、当時の日本の子育て環境や観察が記録されており、子ども達の家庭内での役割や教育、親子間の絆に関する観察が含まれている。(同)

IV 日本人の子育てに対する批判

先述してきたように、日本人の子育て、教育、または日本人の気質を数多くの外国人が賞賛しているのに対して、この日本の家族環境、家族関係に警鐘を鳴らしている人物もいる。それはドイツ人宣教師のカール・ムンチンガー (Carl Munzinger) である。ムンチンガーは西南ドイツのプファルツ地方クヴィルンバッハで生まれ、13 歳で母親と死別している。1883 年からミュンヘン、ストラスブール、ベルリンの大学で学び、1887 年にハイデルベルク大学を卒業している。大学卒業後、プロテスタント教会に属し、代理牧師等を務める。その後ドイツ普及福音神教伝道会の 3 人目の宣教師として 1890 年 (明治 23) に来日する。ムンチンガーが来日を決意した理由には「日本へのあこがれや興味よりも、神から与えられた使命である宣教を行い、牧師としての経験を積むことにあった」と市丸はみている。(市丸, 2003) ムンチンガーは 5 年半ほど日本で過ごし、病気を患って帰国するまで、新教神学校で哲学や教義史を教えるかたわら、様々な執筆活動を行っている。内容としては日本人に関するものや、日本の教会内へ向けた論説も活発に行っ

ている。また明治時代に来日したドイツ人の中では珍しく、日本語の習得に熱心であった。ローマ字で読み書きをし、歌の掛詞を理解しようとしていた姿勢から、日本人の考え方や日本の社会、文化を分析し、理解しようとしていた努力がうかがえる。帰国から4年後、「Die Japaner-Wanderungen durch das geistige, sozi und religiöse Leben des japanischen Volkes (日本人－日本民族の精神的、社会的、宗教的生活の遍歴)」を、1904年に「Japan und die Japaner (日本と日本人)」という二つの著書を著した。この2作目は1作目を改訂したものであり、外国人が書いた多くの日本人論の中でも比較的高い評価を受けているものの一つである。日本でこそ関心が低いものの、当時のドイツにて引用されることが多い著作である。そしてこの著作をライン河畔にある町で訳者が古本屋でみつけ、第1章から第8章の訳をしたものが「ドイツ宣教師が見た明治社会」である。日本におけるキリスト教宣教の実態や教会の発展、キリスト教の受け入れなどのテーマを扱った原書最後の4章は訳者が「一般書として訳出するには適しない」と判断して省略されている。(C・ムンチンガー,1987)

その中で、日本人の親子関係、特に親孝行に注目している。日本の子どもの親に対する態度の中で、親孝行という行い、そういう行いを支える感情は西洋の「愛」とは別の「孝」という感情であると指摘している。では「愛」と「孝」はどう違うのか。ムンチンガーは「愛」だと子どもと両親が同じ高さに立つことになり、「孝」は両親、特に父親に畏敬の念を持ち、それが恐れ of 感情となって「愛」につながるとしている。(同)つまり、日本の子ども達は親に気に入りたい、親を悲しませたくないという気持ちで生きており、それが日本の子ども達を良い子にしていると北田は指摘している。(北田,1999) ムンチンガーはこの親に対する畏敬の念は日本人の倫理感や道徳的行動の根底にあるものだとしている。西洋ではキリスト教が主流であり、神への愛の中に畏敬の念があるが、日本人にとってはこの神が両親のことであり、それほど高い位置にいるからこそ「父親の言葉は宗教のおきてのように、絶対服従を要求するものであった」であったとしている。(C・ムンチンガー,1987)

また、ムンチンガーは親子関係と個人よりも家族全体を大事にする日本の家族制度を貧困問題の素晴らしい解決策として評価している。何故なら、年老いた両親だけでなく、家族全員を面倒見することを義務付けているからである。しかし、その反面、ムンチンガーはこの親子関係、親孝行に限界があるとしている。「同じ日本人が子どもの時は好感が持てるのに大人になると感じが悪くなるのはおかしい事実である。家族のもとにいるかぎり最善を約束する今日の少年も、一たび家を出て世の中に出ると、粗野になるのも否定できない。(中略)この制度はあまりにも狭い。」(同)つまり、伝統的な儒教の道徳では子どもの個性は育たないことを主張しているのである。北田は親に対する「孝」というモラルに支えられている日本の家族制度というものの、その制度はあまりにも狭く崩壊することをムンチンガーはこの時すでに予測していたと指摘している。(同)そしてムンチンガーはこう続ける。

血族共同体や親戚は国民全体に広がらないのである。全人類を囲む絆はこんな方法では生まれないし、良い意味での人類愛、ヒューマニティーはこんな倫理には身の置き場がない、この倫理が一見とても人道的に見えても、である。(中略) 儒教こそ時代の波に押し流される最初のものである。儒教が立っている基盤はもうずたずたになっている。そして時代の兆候に間違いがなければ、ここに家族の生活と道徳の教えとして述べたことが、何十年もしないうちに文化史としての意味しか持たぬようになるだろう。(同)

日本の子育て、子ども観を育み、支えたのは江戸時代の社会体制やその風土、文化であり、その時代時代の背景を支えに発展してきたが、近代である明治時代には時代遅れであるということである。

このように日本人の親子関係、家庭環境の限界を明治の世に示唆していた外国人がいたことに驚きを隠せない。戦国時代(1500年代後半)から幕末期まではほとんどの外国人が賞賛していたのに対して、約250年後の明治時代には評価が一転しているのである。

おわりに

外国人の目に映った日本人の子育てや子ども観を時代を追って、考察してきたが、日本人が子ども達を愛し、いたわる様子を詳細に記録し、外国人達は大いに賞賛した。その背景には、当時の西洋とは違った子育て、子ども観であったからである。日本人は子どもを「小さな大人」とは見えておらず、大人とは分けた全くの別の存在として受け止め、子育てをしていた。しかし、近代西洋の子ども観とも違う、独自のものであった。西洋の子ども観の背景にはキリスト教があり、子どもを理性を持った人間に育て上げるという意識の基づいた、子どもを創造しなおす、神の創造物であるという見方であった。一方、日本ではそのような神という存在や意識もなかった。ムンチンガーの指摘しているように、日本人にとって神と同等であった存在は「親」であったのだろう。つまり、日本人の子どもは親自身の一部であり、分離しておらず、共感できる存在であるが、一人の人間としてみなしていたのではないだろうか。

来日した外国人の手記は、その当時の日本の社会や文化に関する貴重な情報が記録されている。その内容をまとめると、まず挙げられるのが「子どもへの深い愛情」である。多くの記述に出てくるように海外とは違った子ども達への深い愛情を示す親の姿である。そして「教育への重視」である。外国人は日本の親が子ども達に対して教育への強い関心を示しており、特に読み書きや礼儀正しさなどが重視され、子ども達にこれらの価値観を教えることが期待していた。また「規律と規範の教育」である。前述と関連しているが子ども達には規律や規範を教えることが一般的であったので日本の子ども達が礼儀正しく、尊敬の念を持って親や年長者に接する様子の記述が多数見受けられる。さらに「仕事や生活技術の習得」である。多くの場合、子ども達は幼い頃から親の仕事や生計を手伝うことが期待されていたので、親から仕事や生活技術を学ぶことが、将

来の生計を立てるための重要な学習とされていた。そしてこれは性別による役割分担としても表れている。外国人は性別による役割分担が厳格であるとして父親が仕事について、母親が生活技術について教える姿が多く見られている。これは課されている役割や責務が性別によって分けられており、これが家庭内や社会全体で反映されていた。最後は「地域社会とのつながり」である。子ども達は地域社会でのつながりや協力が重要視されており、地域全体が子育てに参加し、子ども達が集団で成長する中で、社会的なルールや価値観を学ぶ機会が提供されていた。

この日本人の子ども観の背景にあるものは農耕民族として発展してきた「調和」を重視する文化からきているのではないだろうか。これはとても根強く、日本人の気質に残り、現在も縛られているのではないだろうか。明治時代以前の社会では、これらの子育てや子ども観によって、日本人の子ども達は親に愛され、成長していったのであろう。しかし、ムンチンガーが指摘しているように明治時代、つまり近代になり、封建社会が崩れ、これまでの日本人の考えとは違う思想が海外からもたらされ、時代遅れの親子関係や子育てが現代の子育てに関する様々な問題の要因の一つになっているのではないだろうか。これは当時の日本人の子育てや子ども観だけでなく、現代でも大きな影響を与えていたことは間違いない。だが、これだけが今日の子育て観や江戸時代などの子育て観に起因しているとはまだ断定することはできない。これらに与えた影響や歴史的背景を探ることは日本人の子育てや子ども観を明らかにする上で重要である。今後の課題として取りあげていきたい。

また西欧との子育て観や子ども観の比較に体罰における西欧と日本の身体観の違いやルソーの著作「エミール」も取り上げていきたい。また近年では日本人と西欧との単純な比較ではなく、東アジアにおける子ども観の研究が注目されている。東アジア諸民族の中で日本人がどこに位置づけるのか、相対比較や相対評価の視点からも研究していきたい。

過去の日本人独自の子育てや子ども観が現代の諸問題の原因になっている可能性は大いにあるが、見習わなければならない点は多々ある。今一度、日本人独自の子育てや子ども観、育児に対する姿勢を見直すべきではないだろうか。

引用・参考文献一覧

- ・アーネストサトウ著 坂田精一訳『一外交官の見た明治維新 上・下』1960 岩波文庫
- ・オールコック著 山口光朔訳『大君の郡 上』1962 岩波書店
- ・村上直次郎訳『イエズス会士日本通信 上』1968 雄松堂書店
- ・E・S・モース著 石川欣一訳『日本その日その日 2』1970 平凡社
- ・A・ヴァリニャーノ著 松田毅一訳『日本巡察記』1973 平凡社
- ・F・カロン著 幸田成友訳『日本大王国誌』1973 平凡社
- ・中江和恵編『子育ての書 一卷』1976 平凡社東洋文庫
- ・フィッセル著 庄司三男・沼田次郎訳『日本風俗備考 2』1978 平凡社

- ・P・アリエス 杉山光信・杉山恵美子 『<子供>の誕生 - アンシャン・レジーム期の子供と家族生活 - 』
1980 みすず書房
- ・A・ジーボルト著 斎藤信訳『ジーボルト最後の日本旅行』 1981 平凡社
- ・C・ムンチンガー著 生態文訳『ドイツ宣教師の見た明治社会』1987 新人物往来社
- ・E・ヨリッセン著 松田毅一訳『フロイスの日本覚書—日本とヨーロッパの風習の違い』1983 中央公論社
- ・荘司雅子『フレーベル教育学への旅』1985 日本記録映画研究所
- ・E・ショーター 田中俊宏・岩橋聖一・見崎恵子・作道潤共訳『近代家族の形成』1987 昭和堂
- ・L・ドゥーモス著 宮沢康人訳『親子関係の進化—子ども期の心理発生的歴史学』 1990 海鳴社
- ・ルイス フロイス著 岡田章雄訳『ヨーロッパ文化と日本文化』 1991 岩波文庫
- ・ロバート・フォーチュン著 三宅馨訳『幕末日本探訪記』 1997 講談社
- ・ハインリッヒ・シュリーマン著 石井和子訳『シュリーマン旅行記 清国・日本』 1998 講談社
- ・アルジャーノン・B・ミットフォード著 長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新』 1998 講談社
- ・北田耕也『近代日本 少年少女感情史考』1999 未来社
- ・イザベラ・L・バード著 高梨健吉訳『日本奥地紀行』2000 平凡社
- ・森山茂樹・中江和恵著『日本子ども史』 2002 平凡社
- ・岩崎浩三・兎沢聖『中世の西洋における子ども観の研究』 2002 岩手県立大学社会福祉学部紀要
第5巻第1号
- ・中江和恵著『江戸の子育て』 2003 文藝春秋
- ・リチャード・ジップル『明治時代の一ドイツ人宣教師の日本観 -C. ムンチンガー著
Die Japaner『日本人』についての一考察-』2003 南山大学紀要アカデミア. 文学・語学編 第64号
- ・市丸祥子『明治期のドイツ人宣教師 カール・ムンチンガーの生涯』2003 九州ドイツ文学会 第17号
- ・ルース・ベネディクト著 長谷川松治訳『菊と刀—日本文化の型』2005 講談社
- ・柴崎正行・安齋智子『歴史からみる日本の子育て - 子育てと子育て支援のこれからを考えるために - 』
2005 フレーベル館
- ・太田素子『子宝と子返し—近世農村の家族生活と子育て』 2007 藤原書店
- ・村形明子『フェノロサ夫人の日本日記—世界一周・京都へのハネムーン』 2008 ミネルヴァ書房
- ・イザベラ・バード著 時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行』(上下巻)2008 講談社
- ・大石学・磯田道史・山本博文・岩下哲典著 竹内誠監修 財団法人上広倫理財団編
『外国人が見た近世日本 日本人再発見』 2009 角川学芸出版
- ・岩下哲典著『江戸将軍が見た地球』 2011 メディアファクトリー
- ・「ニッポン再発見」倶楽部著『日本は外国人にどう見られていたか』 2014 三笠書房
- ・M・C・ペリー著 F・L・ホークス編 宮崎壽子訳『ペリー提督日本遠征記 上下巻』
2014 角川学術出版
- ・河合敦著『外国人がみた日本史』 2015 ベストセラーズ

- ・山本博文監修 『外国から見た戦国・幕末の日本』 2016 宝島社
- ・幼児教育史学会監修 太田素子・湯川嘉津美編
『幼児教育史研究の新地平〈上巻〉近世・近代の子育てと幼児教育』 2021 萌文書林

(しばた けいいちろう：准教授)